

南 昌宏●

“Form follows function (形態は機能に従う)”

井出吉信教授も引用されたこの言葉にある『形態』に対して、われわれはどれほど理解し得ているのだろうか。形態の誤った解釈は、結果的には補綴装置がうまく機能しないという残念な結果につながることになりかねないため、歯の形態を正しく理解することは当たり前のことではあるが、たいへん重要な事柄である。

歯の形態に関しては、歯科医療に従事する者としては本来一般常識の事項であり、それがきちんと修復物に反映されてしかるべきものであるはずが、実際の口腔内に装着されている修復物形態が、それとはかけ離れていることをしばしば目にするものである。そのようなことから、過去において、歯科技工、補綴関連の書籍でも、歯の解剖は幾度となく紹介されてきた。

しかし、残念ながらそれが臨床例とうまく関連づけられているような書物はそれほど多くないように思う。本書はその点で、基礎の項と臨床の項の間に桑田正博先生と西川義昌先生の対談を挟み込んでいることで、両者が有機的につながっているのも特徴である。

あるコンセプト、考え方を理解しようとした場合、正確に、しかも早く理解するには、可能であればそのオリジナルの提唱者に直接伺うことが一番の方法であろう。この本の主題であるBiological crown contourのなかでもキーワードとなる「Emergence profile」という用語は、今日では誰もが使っている言葉ではあるが、さてその意味はと問われたとき、きちんと正確に説明できる者は少ないように思う。

前述の対談ではEmergence profileの概念が生まれたいきさつからその真の意味まで、エピソードを交えながら、発案者の一人である桑田先生自身の口で解説されているという点で、Emergence profileの本当の意味が著述された価値ある対談であるといえよう。

48頁にあるDr. L. Millerの作図した支台歯と修復装置の役割の図はたいへん興味深い。ここに見られる「Tissue Retention」という言葉はすでに1970年ころからはっきりと唱われており、桑田先生らが現在に至るまでその概念を堅持しておられたことであらためて感銘を受けた。

また1963年当時に桑田先生がフルマウスワックスアップを手がけておられること、さらには2008年のワックスアップでは桑田理論が明確に表現されて進化していることがみてとれること、そして現在でもなおフルマウスワックスアップのトレーニングをされていることに、対談をされた西川先生同様、筆者も感銘を受けた。

さらに聞き手の西川先生も桑田先生のコンセプトをうまく聞き出しておられ、桑田理論を支台歯形成、さらには(西川先生のいう



『歯科技工』別冊

Biological Crown Contour

——生体に調和する歯冠形態

井出吉信・桑田正博・西川義昌 編

A4判 168頁 定価5,460円(本体5,200円+税5%)

医歯薬出版株式会社刊

ところの) プロビジョナルレストレーションの進化など、臨床での応用例を呈示しながらわかりやすく解説されている。

一般的に歯の形態を論じるときはどうしても解剖学の教科書の域を出ることは少ないものであるが、本書のPart2では臨床的に重要度の高いデータが立体的に表示されており、特に各歯の水平断、歯髓の位置は視覚的にも参考になった。

それを受けてのPart3は、歯冠形態の臨床的な捉え方がさまざまな角度から細かくていねいに呈示されている。

Part4では生物学的歯冠形態再現のために緻密な診断、治療がなされたケースプレゼンテーションである。たとえ1歯の修復例であっても仔細に症例分析を行い、安全確実な修復装置を装着しようとする真摯な姿勢が伝わってきた。

『臨床は応用問題である』とはいつも桑田先生がいわれる言葉である。本書はその問題を解くための鍵となる歯冠形態を理解するのに必要な情報が多く記載されており、歯科技工士、補綴臨床家双方にとって必読の書である。

(みなみまさひろ 〒530-0047 大阪市北区西天満2-6-8 堂島ビルディング1階 南歯科医院 Tel: 06-6315-0111)